

最終報告書

1. 事業最終報告

(1) 実施団体の概要

- ① 名 称 一般社団法人あいあいネット
- ② 代表者 和田 信明
- ③ 住 所 神奈川県川崎市多摩区東生田1-14-5アムールK2 102
- ④ 電話番号/メールアドレス 044-455-4508 / welcome@i-i-net.org
- ⑤ 助成事業の担当責任者 長畑 誠

(2) 事業の概要

- ① 名 称
インドネシア・西バリ国立公園周辺村における生活向上に結びつく環境教育推進
- ② 対象地
インドネシア・バリ州・ジュンブラナ県・ムラヤ郡・ギリマヌック村、ブリンビンサリ村、
同州ブレレン県・グロガック郡・スンブル克蘭ポック村
- ③ 目 的
子どもと村人を対象にした環境教育（特に身近な植物についての知識・経験の世代間共有）
を通じて、自然資源の保全と持続的な生計向上を振興し、国立公園と地元コミュニティと
の間の協働関係のより一層の強化を図る。
- ④ 内 容
環境教育の展開に関するアクションプラン（具体的な行動計画）を作成し、国立公園職員
と村人（教員を含む）が村の有用植物の基礎的な情報収集を行う。
その後、小学生向けの植物調査ワークショップを実施し、子どもたちの調査結果を絵本に
まとめ、学校や村の集会で成果を共有する。
- ⑤ 貴団体现地事務所、または現地カウンターパート団体（現地事務所がない場合）
 貴団体现地事務所 現地カウンターパート団体
名称：西部バリ国立公園事務所（現地語表記：Balai Taman Nasional Bali Barat）
代表者名：Mr. Tedi Sutedi（所長）
住所：Jalan Cekik-Gilimanuk, Jembrana, Bali, Indonesia
電話番号/メールアドレス：+62-365-61060 tnbb@telkom.net

(3) 事業の振り返り

- ① 事業の結果（計画時の事業の目的や達成目標の指標、裨益予定人数、実施スケジュールなどと照らし合わせて具体的に記述）

1) 事業実施スケジュール

2011年7月：あいあいネット現地専門家（ヨハネス・ゲワ）が渡航し、西部バリ国立公園職員によるプロジェクトチームと会合を行い、小学校を対象とした環境教育のシラバスやカリキュラム案を策定した。

2011年8月：プロジェクトチームによる、ギリマヌク村の小学校2校への働きかけ開始。

2011年9月：ヨハネス・ゲワがプロジェクトチームとともにギリマヌク村の小学校2校を訪問し、環境教育ファシリテーションを試行。次の活動に向けた学校教職員との協議を開始。

2011年11月：植物調査の実行委員会を結成。国立公園の職員と、スンプルクランポック村公立小学校、ギリマヌク村イスラム教小学校、ブリンビンサリ村キリスト教小学校の各学校教職員と保護者たちが参加

2011年12月：同実行委員会の主導で、ブリンビンサリ村とスンプルクランポック村の小学校の児童へのワークショップを実施。それをうけて、子どもたちが植物調査を開始。

2012年1月：同じくギリマヌク村小学校でもワークショップを実施し、児童による植物調査が行われる。日本人担当者渡航。

2012年2月：国立公園に子どもたちを招き、自分たちが絵に描いた植物を観察するフィールドワークを実施。あいあいネット専門家渡航、日本人担当者渡航。

2012年3月：絵本の編集と印刷、完成。

2) 事業の参加者（裨益者）

西部バリ国立公園現場職員によるプロジェクトチーム（8名）

スンプルクランポック村公立小学校（校長、担任教諭、児童35名）

ギリマヌク村イスラム教小学校（校長、担任教諭、児童35名）

ブリンビンサリ村キリスト教小学校（校長、担任教諭2名、児童35名）

上記に加え、児童による植物調査には、それぞれの家庭の保護者（両親や祖父母）が参加。

あいあいネット現地専門家（ヨハネス・ゲワ）、日本人担当者（山田理恵、高橋博）

3) 事業の成果

- a) 国立公園周辺3村の小学生による有用植物調査

スンプルクランポック村、ギリマヌク村、ブリンビンサリ村の小学校各1校で、教職員、保護者、公園職員らによる実行委員会が結成され、子どもたちによる有用植物調査が実施された。最初にまずワークショップを通じて子どもたちは自分の暮らしの身近にある植物への関心を高めた。そして各人が一つの植物をしっかりと観察して絵を描くことと、その有用性を親や祖父母等の周りの大人たちから聞き取りを行った。

b) 有用植物の絵本を作成

調査に参加した子ども達の絵と文章を、絵本に編集した。全部で67名の子ども達による92枚の絵と文章が集められ、公園職員の撮影した写真とともに編集された。掲載された植物は、タマリンド、赤タマネギ、ニンニク、ドラゴンフルーツ、ペニシリン、トウモロコシ、ショウガ、カシューナッツ、ライム、ユーカリ、ココナッツ、スターフルーツ、グアバ、ウコン、ニンジン、キャッサバ、バナナ、パパイヤ、パッションフルーツ、アロエ、バジル、ノニ等、40種類にのぼる。絵本は40部作成され、各小学校と県教育文化局、村役場、林業省本省、地元NGO、各村の住民組織（ギリマヌク村漁民グループ、スンプルクランポック村カンムリシロムク繁殖グループ、ブリンビンサリ村観光委員会）等に配布された。

c) 子どもたちや親の身近な環境への意識の向上

これまで各小学校では国立公園職員による環境教育の授業が実施されていたが、それは「子どもたちに自然の大切さを教える」形式のものであった。今回のプロジェクトでは、子どもたちが自ら身近な自然の大切さに気づき、さらに周囲の大人を巻き込んでいくことを重視して、植物を観察して描くことと、その使い道を周囲の大人から聞き取ることを中心に据えた。その結果、多くの子どもたちが大変熱心に植物の観察と大人からの聞き取りを行い、「自分たちの周りにはこれだけ有益な植物があるんだ」と実感することができた。一方、大人たちも身近な自然の意味を再認識するとともに、その知識が若い世代に伝わっていないことに気づくことができた。

② 事業結果についての評価（所感、および反省点など）

(ア) 成功したと判断する点、その理由

3つの村の小学校では、教師たちが「有用植物の観察と絵本作り」というコンセプトに大変共感してくれ、子どもたちに積極的に働きかけた。また子どもたちも、熱心に観察と描写、聞き取りに取り組んだ。その結果としてできあがった絵本は、子どもたちの鋭敏な観察力と、聞き取りの力を示すとともに、いかに多種多様な

植物が村人の生活に密接に関わっているかを表している。そしてこの絵本の作成過程を通じて、村人たち（老若男女）が自分達の身近な自然環境を守ることの大切さに気づき始めている。

- (イ) うまくいかなかったと判断する点、その理由（対応済みの場合にはその内容を記述）
- 国立公園側の事業スケジュールの関係で、活動の開始が7月にずれ込んだが、主な活動は期間内に実施することができた。完成した絵本の共有とその後の活動計画作りは2012年4月以降になってしまったが、引き続き国立公園職員が村や小学校との関係を継続しており、既に各小学校との共有を行っている。

③ 本計画の中長期展望（計画）

1) スンプルクランポック村カンムリシロムク生息地整備への応用

今回実施した村の一つであるスンプルクランポック村では、この地域の固有種であり絶滅危惧種でもあるカンムリシロムクの保護に向けて、住民による人工繁殖と生息地整備活動が始まっている。国立公園はこの活動を全面的に支援しているが、今回の絵本作りの成功を受けて、今度は公園周辺村の中学生を対象に、カンムリシロムクにとって有用な樹木の調査観察と絵本作りを計画している。中学生がカンムリシロムクの生息に必要な樹木について調べることで、生息地保護への関心を高め、その調査のフィードバックを村人に対して行うことで、より多くの村人を巻き込んで、植樹活動が展開されることを目指す。村では人工繁殖したカンムリシロムクを2014年に放鳥することを計画しており、その時までには植樹を通じて生息環境を整えておき、放鳥後も村の中にカンムリシロムクがとどまることで、「カンムリシロムクの飛び交う村」として観光振興にも繋げることを期待している。

2) 各村の小中学校との協働の展開

今回の絵本作りをうけて、上記の活動を国立公園周辺で中学校を対象に行い、カンムリシロムクの生息地拡大への意識を高めてもらうことを国立公園チームは計画している。また中学生による調査・観察を行った後は、中学生が小学校に行ってフィードバックし、調べたことを子どもたち同士で共有する活動も企画中である。

3) 村人の収入向上活動への応用

今回の植物調査には、食用や薬用になる多くの植物が含まれ、それらを再認識して活用することが、村人の生活向上に繋がると考えられる。その中でも特にMenkudu（絵本65頁記載、和名ノニ）という植物は内臓疾患の漢方薬として使われているが、乾燥地に生えやすいこの植物を、雨の少ない公園周辺村で植えて増やす考えが村人の中に生まれている。